

一部の「過激」な性教育ではなく主流言説を ターゲットとした2000年代性教育批判の構図 —『現代性教育研究』による性教育主流言説の形成を手掛かりとして—

広瀬 裕子

1 はじめに

本稿は、1972年から1983年にかけて日本性教育協会（Japanese Association for Sex Education, JASE）が刊行した『現代性教育研究』（小学館）を題材にして、1970年代以後の日本の性教育の主流言説の形成と特徴を明らかにするとともに、2000年代に展開した「性教育バッシング」と呼ばれる大掛かりな性教育批判が、一部の「過激」な性教育をターゲットとしたものではなく日本の性教育の主流言説をターゲットとしたことを明らかにする。

1972年に設立された日本性教育協会（JASE）は、設立を機に機関誌である『現代性教育研究』を刊行する。JASE設立は、日本の性教育の主流言説が、戦後直後に文部省が主導した「純潔教育」からJASEが主導した性科学（セクソロジー）に足場を置く性教育へと転換していく礎となる。性科学に依拠する開放的な性教育を発信した性教育協会とその機関誌である『現代性教育研究』は、性教育のカリキュラム構築をも含めて、1970年代以降の性教育の主流言説の形成に多大な役割を果たすのである。

近年2000年代に展開した大掛かりな性教育批判のキャンペーンは、日本の性教育の性格を理解する上で無視することのできないできごとである。本稿は、この性教育批判キャンペーンを一部の「過激な」性教育をターゲットとした

ものではなく、『現代性教育研究』によって培われた性教育の主流言説に向けられたものであると主張しようとしている。その構図を把握するために、JASEに加えて同じく日本の性教育を主導してきた代表的組織の一つである‘人間と性’教育研究協議会（性教協）にも目を向ける。JASEと性教協が日本の性教育実践を牽引する双璧の組織でありつつ、しかし対立する関係にあったこと、そしてその対立関係がそれぞれの組織を主導する人物、すなわち田能村祐麒（1923-2009）と山本直英（1932-2000）の対立として現象していたことは知られている（西垣戸 1993）。1980年代以降実質的にJASEをリードした田能村は、教員として、また地方教育行政の担当者として性教育の普及に努め、中央地方府の性教育政策にアドバイザーとして深く関与してきた人物である。一方、山本は、教員として性教育を推進し、1982年以降は自らが設立した性教協に主たる活動の場を移した。田能村、山本ともにJASEに初期から関わり、『現代性教育研究』に論稿を定常的に執筆し、実践領域に影響を持った。

2000年代に展開した大掛かりな性教育批判が、山本が生前代表を務めていた性教協に向けられていたことは知られている。性教協は1982年に山本らによって設立された民間組織で、性教育実践者を主な会員として科学・人権・自立・共生を「キーワード」に掲げて性教

育の推進活動を精力的に行ってきた。性教協をもっぱらの対象として展開した2000年代の批判キャンペーンは、しかし、1990年代にすでに前哨戦を経験している。教育学者である高橋史朗らが、性教協のメンバーの実践をターゲットとして、彼らが行う性教育を、避妊や性交を肯定的に扱うなどしているとして「過激」だと批判していた（高橋 1993a）。この時期の高橋らによる性教育批判は、学習指導要領の1989年改訂を受けて性教育にスポットライトが当たった流れを受けている。学習指導要領の改訂内容自体は大きなものではなかったが、初めて保健の教科書が作られるなどしたこともあり、マスコミはこの改訂を「性教育元年」とセンセーショナルに報道した。性教育関係者は活気づき、性教協のメンバーもメディアに頻繁に登場した。「生命の神秘性・尊厳性」を重視し、性教育の「性急」な展開はすべきでない（高橋 1993a : 88）と考える高橋らは、こうした動きを快く思わずに、性教協をターゲットとしてその実践を批判したのであった。性教協の代表であった山本は、性教育を激しく批判する高橋らを「純潔教育」推進者とカテゴライズして、彼らの批判を「ドグマとイデオロギーの先行した誹謗キャンペーン」であると反論した（山本 1994 : 10）。

性教育批判を率いた高橋の登場は性教育言説の構造を見る上で無視できないのだが、それは、高橋らの批判がそれまでにない直裁なものであったからというよりは、もちろんその批判内容も一考しなければならないのだが、それよりも田能村と山本の対立を際立たせたからである。高橋は山本を批判する一方で、田能村と共同して出版事業を行うなどしている（田能村、高橋 1993）。高橋のこのような形での「参戦」は、「山本」対「田能村」という図式を「山本」対「田能村・高橋」という図式に組み替えて、田能村と山本の対立を増幅したのである。山本は

高橋と同様に田能村をも「純潔教育」推進者に含めた（山本 1994 : 21）。

2002年から始まった性教育バッシングといわれる全国規模に及んだ性教育批判の対抗の構図は、1990年代に見られた批判の構図と類似している。しかし、2000年代の批判キャンペーンのターゲットは、性教協関係者以外の性教育にも及んだ。全国性教育研究団体連絡協議会（全性連）理事長であった田能村は、このターゲットの拡大を、批判されるはずのない性教育実践までもが攻撃の対象にされた理不尽な性教育批判のカオス化現象であると理解している。そして「一部の行き過ぎた性教育」にとどまらずに学校教育の性教育全体が「批判の影響を受け」て停滞したことに不満を述べるのだった（田能村 2004、2006）。こうした不満の表明は、とりもなおさず、「一部の行き過ぎた性教育」として想定されている性教協の性教育実践と自身が関わる性教育実践を差異化して認識していることの表明でもある。

しかし、注意しなければならないのは、田能村と高橋を山本に対置させるこうした括り方は、日本の性教育の言説構造を理解する上ではミスリーディングだということだ。性教協を軸にした場合には、性教協の批判者として高橋の側に田能村を位置づけることができるとしても、日本の性教育言説を俯瞰した場合には、田能村は高橋よりも山本に格段に近いはずだからである。田能村も山本も、それぞれ、科学的で開放的な性教育を推進しようとしていた創成期のJASEの熱気を受け継ぐ、いわば日本における性教育のメインストリームを継承する場所にいることは間違いないからだ。

確かに、田能村と山本には相容れないところは観察される。性教育における性交指導を不可欠なものとして重視していた山本と、とりわけ小学生に対する性交指導は慎重であるべきだと

するようになっていた田能村は、性教育実践の理解に違いを示す。しかし、セクソロジー的知見を性教育理解のコアに持つ両者の間の距離は、例えば、英国のヴァレリー・リッチーズ (Valerie Riches) に親近感を持ちながら (高橋 1993b) 性教育批判をする高橋との距離より格段に小さいといわなければならない。いうまでもなくリッチーズは、イギリスの道義心協会 (The Responsible Society = Family and Youth Concern) を率いて、1980 年代以降、家族計画協会が主導していた性教育をキリスト教的価値観に依拠して批判していた人物であり、セクソロジーには批判的である (広瀬 2009: 226-229)。

田能村と山本の間に見られる差異を主流的言説内部のバリエーションであり、両者ともに日本の性教育言説のメインストリームを牽引する場所にいたと理解することによってこそ、状況を整合的に説明できる。2002 年からの性教育批判が JASE をも巻き込んだのは、「バッシング」の担い手がターゲットを見誤ったからというよりは、構図としては、批判者たちが日本の性教育言説のメインストリームをターゲットとしていた形になっていると言うべきなのである。

このような理解に立ち、本稿では、日本性教育協会 (JASE) が 1972 年から 1983 年まで刊行した『現代性教育研究』に焦点を当てて、1970 年代以後の日本の性教育言説のメインストリームの整備形成とその特徴を把握し、2000 年代の性教育批判が一部の「過激」な性教育ではなく JASE に始まる性教育の流れ、すなわち性教育の主流言説に対するものであったことを確認する。

2. 日本性教育協会の設立と『現代性教育研究』の発行

戦後日本の性教育の出発点は、第 2 次大戦直

後の 1946 年 11 月 14 日に次官会議で決定された「私娼の取締並びに発生の防止および保護対策」にあるとされる。「公娼廃止の趣旨を徹底して接客婦の自由を拘束する諸制限を撤廃すると共に所謂『闇の女』の発生を防止する」ことを目的としたものだ。この通達を受けて翌年 1947 年 1 月に文部省社会教育局長は「純潔教育の実施について」を通達し、また、純潔教育委員会および純潔教育懇談会が設置されて純潔教育の普及活動が図られた。文部省の社会教育局が主導したこの政策は、街娼問題から不良青少年問題へ、さらには一般青少年男女への教育的介入へと、次第に教育領域を対象とするように変わっていった (斎藤 2012)。一方、学校教育においては、保健領域の授業として戦後直後から性教育が進められていたが、性教育は純潔教育の陰に隠れて「細々ながら」(田能村、高橋 1993:14) 行われている状態であったという。純潔教育懇談会が廃止された 1960 年代には「純潔教育」推進策も下火になり、以後しばらくは、性教育に関する出版や新しい活動などが個別に登場する状況であった。

1972 年に設立された財団法人日本性教育協会 (JASE) は、そうした性教育に関する言説状況を一変させることになる。JASE は、文部大臣から設立認可を受けて設立された性教育に関する「わが国では最初であり唯一の法人」(間宮 1981) であり、大手出版社の一つである小学館が財政的な支援を行った。JASE 設立にあたった主要メンバーは、性科学者朝山新一、医事評論家村松博雄らである。また、純潔教育政策の過程で設置された純潔教育懇談会のメンバーであった心理学者間宮武も参加している。理事長には前厚生大臣内田常雄、監事の一人として前文部大臣劔木亨弘が就いた。常務理事には、先の朝山、村松に加えて、小学館から林四郎が入っている。

JASEは、設立の背景と目的を次のように言っている（日本性教育協会1972）。

性に関する価値観と風俗は急速に多様化し、変貌しつつある現代 — この風潮の中でわが国のみならず、世界各国とも若者と成人の間には性意識、性行動に大きな断絶があります。これに対して、共通理解の尺度と対話の場がないのが実情です。このような状況の中で、家庭・学校・社会のそれぞれの場において、性に関する望ましい認識が育てられ、適切な教育について研究が行われることが待たれておりましたが、このたび文部大臣の認可を得て「財団法人日本性教育協会」が発足いたしました。

私どもは、1.教育に関する基礎的な調査・研究を行ない、内外の資料を収集・分析するデータバンクの開設、2.性教育に関する研究会、講演会、講習会等の開催、3.性教育に関する雑誌、図書、資料の出版 — を通じて望ましい性教育についての研究を進め、社会の向上に貢献することをめざしております。

すでに欧米をはじめ世界各国の諸団体、学界との連携も決定し、情報・資料・研究の各分野でわが国を代表する国際的機関としてお役に立ちたいと願っています。略

目的の一つである出版活動の主軸として取り組まれたのが、『現代性教育研究』の刊行である。『現代性教育研究』は、小学館から出版される一般向け商業的雑誌として形を整え、1972年から1983年まで計58号が発行された（第1号から16号までは季刊、第17号から58号までは隔月刊）。主な読者は教員、学校、教員委員会、医療関係者などで、毎号約2000部が印刷された（JASE事務局調べ）。同誌は、性教育に

関する基本的な理解、海外の性教育についての情報、学校の性教育カリキュラム、性教育に関する教育行政の情報、性教育が直面する諸問題、性教育関連の調査データ、性に関する歴史、性に関する一般的な社会動向や世論などを内容とし、創成期10年のJASEの活動をほぼリアルタイムに発信するとともに、性教育に関する情報発信を精力的に行った（各巻概要については文末資料参照）。性教育をどのように捉えるべきかという基本軸、および性教育がどのような領域をトピックとして扱うのかという指針、いわば性教育に関する基本言説が、『現代性教育研究』の発行によって形成されたといえる。

3. 性教育の基本的立場をセクソロジーに設定

『現代性教育研究』が設定する性教育の基本的枠組みは、出発点においてセクソロジーに焦点づけられた。キーノートとなったのは、第1号と2号に連続して掲載されたシンポジウム「性教育とは何か?」と、L. A. カーケンダールによる2本の特別寄稿「現代社会における性の役割」および「現代社会における性教育の役割」である。

シンポジウム「性教育とは何か?」は、JASE創設期の主要メンバーである朝山新一、黒川義和、間宮武、村松博雄の4人に加えて、フランス文学者で文化論に通じた多田道太郎を加えた5名で行われている。多田道太郎は、その前年に性教育に批判的に言及した『性』（松田1971）の執筆に関わった関係でこのシンポジウムに参加しており、このシンポジウムでは性教育に批判的な立場からの発言となっている。

このシンポジウムが繰り返し焦点化するの、性の社会的、心理的生側面に加えて生物学的解

剖学的側面である。朝山、村松、黒川は、性に関する生物学的解剖学的側面を大事にするセクソロジーの知見を性教育に不可欠な視点として重視する。一方で、多田は、性や性教育を科学的、生物学的な知識に集約するような理解は、「一種の科学信仰におちいった文明の狭さ」だとして批判し、情操的な部分が大事である性を、分析的学問を教えるところになっている学校で教えることは困難であるなどと主張する役回りとなっている。

性に関する生物学的な知識の教育を困難にしている背景として、性に対する羞恥心について彼らは共通に論じている。この羞恥心は、性教育の障害として語られている文脈と、性にまつわる人間関係の文化として把握されている部分とあり、取り除くべきは、「科学主義で突破できるニセモノの羞恥心」、すなわち前者ということになる。日本独特の文脈に即した性のベクトル理解もシンポジウムの中心的テーマとなっている。多田が、「スウェーデンなんかでも、非常にフリーであるように見えてその実、一夫一婦制を支えるモラルはうんときびしい」と指摘し、「むしろ日本の方が締め付けが弱い」と、日本の性文化の特徴を指摘する。これに応じて朝山も、日本に広く共有されていた「外道」の文化に触れながら、「表と裏が共存共栄しているのが日本の文化」であり、性は、「裏の外道では自由に解放された。おかまをはじめ、何でもあった。レズビアンかて、女が禁欲させられていたから、社会の中では外道として見て見ぬふり」をしていたと応じる。すなわち、性の考察に当たって多様な領域がタブーなしに取り上げられ、生物学的解剖学的アプローチによって、「外道」すなわち性の裏側とされた領域も、裏ではなく「ディスオーダー」として表の領域で分析されるようになる。しかし、「ディスオーダー」とされた性の多様なファクターを、その

先の理解、すなわち、性的少数者という観点から人権的概念によって再構成するアプローチは未だない。それは、次に出てくるカーケンダールにおいても同様である。

4. 山本宣治ではなくカーケンダール

シンポジウムが設定したセクソロジー的な観点から、性の見方、性教育の考え方を体系的に提示する役回りは、L.A.カーケンダールが担っている。創刊号と第2号にカーケンダールの特別寄稿の論稿「現代社会における性の役割」と「現代社会における性教育の役割」が連載されている。カーケンダールは、以後の日本の性教育の理解の仕方に大きな影響を与えた人物である（鹿間 2005）。論稿の内容は、性科学がどのようなことを明らかにしてきているかについて10項目、従来の性教育の問題点を整理して10項目、求められる性教育の目標として5項目、性教育の基本原則が10項目、そして、性教育担当者の資格として10項目などである。今日的なトピックがほぼ提示されている。ただし先にも述べたように、性的少数者という概念は未だなく、また性感染症も大きな扱いとなっていない。すなわち、以下のような内容である。

性科学の知見に則った10の見解は、1. 性の本質は性意識や性行動に限定して捉えられるべきではなく幅広い行動様式の中に存在する、2. 個人にとって男性（女性）であることの意義は生涯を通じてのものである、3. 人間の性行動は本人の全人格の現れである、4. 性欲は自然で正常な現象である、5. 自慰は年齢や性（ママ）にかかわらず許容されるべきである、6. 性行動は当事者間の責任に帰すべきであって他人に干渉される理由はない、7. 身体的満足だけでは対人関係は長続きできない、8. 異性間の性行動は人格を結合させる機会であり幸

福な人生を賛美する一種の儀式ですらあり得る、9. 性行動は結婚などの制度の上で認められるかどうかではない、10. 「不倫」行動は強制力や恐怖感によっては矯正できない、である。

従来の性教育の問題点としては、1. セクシュアリティの教育というよりは生殖教育であったり道徳教育であったりした例が多い、2. 特定の行動様式は示唆したかもしれないが応用性においては全く欠陥があった、3. 「人生の真理」に関する知識教育という固定概念があった、4. 各自が主体的に考えて判断する点を無視してきた、5. 性にできるだけ触れないで逃げ通そうという消極的な態度であった、6. 性教育を与えれば道徳上の問題がすべて解消されるとする免罪符とする傾向があった、7. 公開の場で討論するよりもコソコソと行われがちであった、8. 両親のみの仕事または教師のみの仕事と考える人も多かった、9. 一人一人の人生でなく統計上の数字をあまりにも重視しがちであった、10. 性教育を名人芸だと考え一部の専門家に頼りすぎた、である。

また、性教育の基本原則としては、次の10項目が挙げられている。すなわち、1. 性教育は人間経験のすべてである、2. 性教育は生涯教育である、3. 性教育は両親の態度である、4. 性教育は人生哲学である、5. 性教育は家族関係学である、6. 性教育は生命尊重の具現化である、7. 性教育は健全な発達に不可欠である、8. 性教育は無理な隠しだてをしない、9. 性教育はガイダンスである、10. 性教育では行動よりも動機を尊重する、である。

以上のような内容を確認した上で、ここでは『現代性教育研究』が出発点としたキーノートを、日本の先駆的な性科学者である山本宣治(1889-1929)ではなくカーケンダールから導き出している点に注目したい。山本宣治が大正期にいち早く性科学認識の重要性を説き、『性教

育』(山本 1923)を著すなど卓越した性科学の成果を残していることは周知である(山本 1999)。世界セクソロジー協会(WAS)による国際性学賞の第1回(1979年)受賞者でありJASEの設立者の一人である朝山新一は、世界的な性科学の水準と比較し、山本宣治の『『性教育』と『性調査』は、欧米をはるかにさきがけるものであった。』と評している(朝山 1973: 147)。しかしながら、山本宣治は、反体制的労働運動に加わるようになったことで大学から追われ、またのちには右翼団体のメンバーに暗殺されることになる。自由民主党政権時代に文部大臣の認可を受けて設立されたJASEが、共産主義的イメージをまとう山本宣治ではなく当時日本で無名だったアメリカのカーケンダールによるセクソロジーの知見を出発点としたことは、冷戦期の自民政権下に安定的な立ち位置を順応的に確保する上で有利に働いたとみてよい。

5. 性教育と純潔教育 非連続の演出

JASEが主導する性教育と戦後直後の性教育政策の関係についても触れなければならない。両者は必ずしも不連続ではない。純潔教育懇談会のメンバーであり、『日本の純潔教育』(間宮 1969)の著書もある間宮がJASEに創立時から参加していることを見ても、それはいえる。また、小山静子が純潔教育政策は男女共学制と表裏をなす(小山 2014: 32)と指摘するように、戦後の純潔教育は男尊女卑の男女関係の一新を意図したもので、文部省から出されていた5冊の純潔教育シリーズの1冊である『男女の交際と礼儀』(文部省 1950)も民主的で健全な男女交際の重要性を指摘するなど、当時にとっては革新的なものであった。

しかし、純潔教育政策は、その保守的側面が頻繁に指摘されてきたことも事実である。田能

村は、純潔教育政策について、「純潔教育の最初の手引き（「純潔教育基本要項」のこと-広瀬）は、これは青少年にとって当然ぶつかる問題であるのだから、いろんな意味で幅広く学習しなければいけないと書いている。それはきちんと読めば、今でも通用するようなことを書いてあるが、その付録の方で委員長が『純潔とは』という解説をしているので、これでおかしくなった。」（田能村・高橋 1993：14）と回顧する。委員長の解説というのは、「性的交渉は、結婚当事者間におけるもののみを純潔と認める」（文部省 1949）とされた箇所を指す。朝山も、著書『性教育』の中で、純潔という言葉は肉体中心の処女性尊重思想と主体性のない男性従属の性道徳を想像させるから、純潔教育政策の「要項が《性教育 sex education》を“純潔教育”という言葉であらわしたのは、すこしまずかった」と指摘する（朝山 1967：3-4）。

純潔教育政策が何故に「純潔」という用語を用いたのかについては、文部省社会教育審議会は、性教育という用語がまだ一般的でなく、この言葉の印象から極くせまい意味に受取られるおそれがあったからだとして説明している（文部省 1955）。しかし、政策立案者の意図とは別に、純潔という言葉が、朝山が指摘するように女性の処女性を連想させて「主体性のない男性従属の性道徳」を連想させるという指摘も的外れではなく、政策が想定した内容と「純潔教育」という名称が必ずしも順接せずに理解されるようになるのである。間宮が「教えてもどうにもならない人間関係の面を強調しすぎて、純潔教育なんて名前までついている。」（朝山他 1971：181）と指摘するように、人間関係やモラルに過重に重心がかかっていたという特徴もあろう。

純潔教育と性教育の異同に関する混乱が無視できなくなると、文部省は1972年3月に性教育を指す用語についてコメントを出すに至る（文

部省 1972）。そこにおいて、文部省は、「純潔教育と性教育とは、本来、その意義、理念つまり、目的および内容が異なるものではないと考えられます。よって、今後は、純潔教育と性教育とが同義語であるとの見解に立って、事務をすすめることとします」と、性教育と純潔教育の違いはないという見解を示した。

『現代性教育研究』第7号（1973.12）は、理事である黒川によるQ&Aの形式でのこの用語問題の解説を載せている。黒川は、文部省の見解を紹介しながらも、純潔教育という言葉に性教育という言葉が次第に取って代わってきたのは、言葉のニュアンスの違いやカバーする領域の違いというよりは、性教育に対する人々の視点や姿勢が変化してきたからだとしている。また、第11号（1974.12）では、全国的にどちらの用語が使われているかの調査結果が報告されている。調査では、各地の性教育手引き書40冊を調べた結果、性教育28冊、純潔教育9冊という傾向となっている。性教育を指す公式名称は、その後も変遷し、今日に至るまで、日本の性教育の一つのトピックであり続けている（広瀬2014）。用語をめぐるこのような混乱の中で、『現代性教育研究』が性教育という用語で情報発信を始めたことは、純潔教育政策と不連続ではないにしても、新しい出発点を明確に示す効果を持っていたといつてよい。

6. 学校の性教育のカリキュラム作成

JASEの主要活動の一つは、学校教育での体系的な性教育のカリキュラム作成である。『現代性教育研究』は、毎号、幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特殊教育をカバーして指導案や実践情報を収集して発信し、カリキュラムに関する知見の集積場所となった。それらの知見は、JASEが作成した『性教育指導要

項』（日本性教育協会 1979）に集約活用される。作成された『性教育指導要項』は、文部省が『学校における性教育の考え方、進め方』（文部省 1999）を刊行するまで、実質的に性教育カリキュラムの全国基準として参照されることになる。同要項の内容を広く関係者に周知させるメディアとなったのも、『現代性教育研究』である。同要項に準拠した体系的なカリキュラムについての解説は、第39号（1979.8）から毎号の『現代性教育研究』で11回にわたって発信された。田能村祐麒、山本直英らは、指針の作成に関わると同時に、継続的に『現代性教育研究』にカリキュラムに関する論稿を執筆し、性教育実践に関するアドバイザーとしての役割を明確にしていった。

授業実践の中でも最も関心を持たれていた一つが性交指導である。性交指導に特化した特集あるいは記事が第17、18、23、24、25、26、45の各号で取り上げられている。第17号では実践記録として「私はこうして小学生に性交を教えた」（東京都板橋区立徳丸小学校教諭 武川行男）という性交指導報告が掲載され、第18号では、「カリキュラム研究シリーズ 小・中・高における性交の指導研究」として、性教育カリキュラム研究委員会のメンバーとして田能村が全体の指針を論じ、「小学校における性交の指導研究」（佐橋憲次）、「中学校における性交の指導研究」（阪巻秀三）、「高等学校における性交の指導研究」（山本直英）が各論を論じた。田能村は、性交について教えるには、子どもたちが事前に知っていなければならない下位要素があることを指摘し、性交を突出して教える授業ではなく体系的なカリキュラムの中で指導することの必要を論じている。小学校での指導を第18号で論じた佐橋は、低学年で自己の出生、中学年で子どもの出生、高学年で受精の仕組みにポイントを置かたちで性交を扱う

方法を紹介し、中学年と高学年で想定される精子を母体に送り込むことを扱う授業では、「情緒面を大切にしたいあつかいをする」ことが大事であるとしている。また、中学年では「性交の図解などは、特に使用しなくても良い」と留意点を記している。中学校での指導を論じた酒巻は、性交についての指導がない性教育の授業では「シラけたムード」を作ってしまうことがあることを指摘し、「日本の住宅事情や家屋構造からいって、両親の性交を見る例は多い。不潔感を持ったり、ショックを受けたりすることがあるわけだが、その場合でも、性交の意味についての認識が高めてあれば、容易に割り切れる結果となろう。」というコメントを添えている。高等学校での指導を論じた山本は、愛情があれば性交をしても良いと考えている者が増える傾向にあるとして、社会的な文脈での各種状況に応じた性交評定を独自のマトリックスで示す授業を紹介している。

第23号、24号、25号は、「短期集中連載講座 私ならこの主題をこう指導する」という連載の中で、連続して性交指導が掲載された。試行段階にある性交指導が文字通り試行錯誤されていた様子がわかる。第25号記事では、第7回JASE夏季セミナーの小学校部会と、第8回全国性教育大会（日本性教育研究会）で性交指導の是非等が議論され、「納得できる適切な指導内容が見当たらない」という意見が続出し、両会場ともに性交指導は難しいという雰囲気があったとも記されている。第26号では「実践記録、教え子とともに考える、人間にとって性交とは何か？」（兵庫県村岡町立兎塚中学校教諭 西村登）が掲載され、第45号では、JASEが編集した『性教育指導要項』に沿った連続解説コーナーで、山本が高等学校について性交指導の仕方を書いている。

性交指導に関する一定の蓄積ののち、田

能村は、性交指導が直面する諸問題に目を向けて、指導におけるレディネスの重要性を強調するようになり、山本は、性交を避けずに教えられる教師の力量形成の重要性を強調するようになり、性交指導に関する両者の異なった立場が顕著になってくる。

7. まとめ

1972年から1983年にかけて刊行されたJASEの機関誌である『現代性教育研究』は、戦後直後に文部省が推進した純潔教育を性教育に関する古い概念として対置する構図で、新しい性教育研究の土台を一気にセクソロジーに設定した。同誌による「性教育」という用語の意図的な使用も、性教育に関する新旧の概念を演出した。『現代性教育研究』に経年的に集積されたカリキュラム知見は、JASE編集の『性教育指導要項』に体系化して集約し、その体系的なカリキュラムは同時に同誌を通じて全国に発信された。同誌が主導したセクソロジーに依拠する開放的な性教育は、以後の日本の性教育の主流言説として形作られた。

田能村はのちに振り返っている。「あのころは、挙げて性解放というような雰囲気があり、セミナーに参加している人達に、自分の意識は解放されているといった思い込みや試行錯誤もあって、ごちゃごちゃしていた。それも楽しかったんでしょうね。つまり日本は封建的で閉鎖されている、それを打ち破るのは自分達だ、という高揚した気分があった。その実、何から解放されるのかは、はっきりしないままで、焦点もずれているところが多々ありました。」(宇野他 1995:24) この回想は、JASEを拠点とした新しい性教育の形成の熱気を物語っている。その後、「純潔教育から生殖生物学を土台とした性教育」へという流れ、すなわちセクソロジー

に特化して重点を移した傾向も反省され(間宮 1995:19)、1986年には全国性教育研究大会で、「従来の生理的側面に傾斜していた性教育から、総合人間学として生理・心理・社会的側面を盛り込んだセクシュアリティ教育への転換が必要なこと、性の価値観、知識、態度の他律的な押しつけを排し、自己決定を援助する教育であることが確認された。」と、間宮は振り返る。すなわち1970年代に国内に整備形成されたセクソロジーに依拠した性教育の主流言説は、より広いセクシュアリティ教育へと向かい、さらに例えば性的少数者という問題認識を手に入れるなど、その後少しずつ修正されながら発展的に展開されていくことになる。

と同時に、展開のバリエーションは、山本と田能村の性交指導をめぐる対立という現象も生む。彼らの対立はしかし相反する性教育哲学に依拠する対立というよりは主流言説の枠内での見解の違いであると把握する方が内実に即している。2000年代の性教育バッシングが山本にとどまらず両者をターゲットとしたのは、批判すべき対象が拡大的に誤認されたということではなく、セクソロジーを基盤としながらセクシュアリティ教育として発展してきた、学校における性教育のメインストリームがターゲットとされたということなのだと言った方が整合的なのである。対立関係にあったと考えられていた田能村と山本を、2000年代の大規模な性教育批判がともにターゲットとしたことは、そもそも両者は性教育のメインストリームにいたのだということを再認識する契機となったといえてよい。

(本稿は、JSPS 科研費 24531018 の助成研究の一部です。)

〈参考文献〉

- 朝山新一 1967『性教育』中公新書
 朝山新一 1973「解説 歳月を感じさせぬ新鮮さと正しい指摘（山本宣治「性教育」1921について）」『現代性教育研究 4』小学館
 宇野賀津子、窪田紀二、田能村祐麒、宮原忍 1995「座談会 性教育の過去、現在、未来」『わが国の性教育25年』日本性教育協会、全国性教育研究団体連絡協議会
 小山静子 2014「純潔教育の登場—男女共学と男女交際」、小山静子・赤枝香奈子・今田恵里香『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会
 鹿間久美子 2005「L.A. カーケンダールの性教育思想の研究」『現代社会文化研究』No.34、新潟大学
 斎藤光 2012「「純潔教育施策」目的の微妙な拡張—純潔教育委員会開催以前の社会教育局官僚の発言から—」京都精華大学紀要41
 高橋史郎 1993a「これでいいのか性教育」『現代のエスプリ』1993.4 至文堂
 高橋史郎 1993b「欧米の性教育」『現代のエスプリ』1993.4 至文堂
 田能村祐麒 2004「第34回全国性教育研究大会開催のごあいさつ」（プログラム資料）於山口県
 田能村祐麒 2006「第36回全国性教育研究大会開催のごあいさつ」（プログラム資料）於神戸大学
 田能村祐麒・高橋史郎編 1993『現代のエスプリ 性と生命の教育』至文堂
 西垣戸勝 1993『性教育は、いま』岩波新書
 日本性教育協会 1972「設立のご挨拶」『現代性教育研究 1』小学館
 日本性教育協会 1979『性教育指導要綱』
 広瀬裕子 2009『イギリスの性教育政策史：自由化の影と国家「介入」』勁草書房
 広瀬裕子 2014「学校の性教育に対する近年日本における批判動向—「性教育バッシング」に対する政府対応—」『社会科学年報』専修大学社会学研究所
 松田道雄編 1971『性』筑摩書房
 間宮武 1969『日本の純潔教育』明治図書
 間宮武 1981「わが国の性教育はなぜ定着しないか」『現代性教育研究 45』小学館
 間宮武 1995「新しい時代の性教育は確立したか」『わが国の性教育25年 全国性教育研究大会四半世紀の記録』日本性教育協会・全国性教育団体連絡協議会
 文部省 1949「性教育のあり方」『純潔教育基本要項』の付
 文部省 1950『男女の交際と礼儀』
 文部省 1955「純潔教育の普及徹底に関する建議」（昭和30年3月18日文部省社会教育審議会）
 文部省 1972「純潔教育と性教育との関係について」文社婦第80号局長裁定
 文部省 1999『学校における性教育の考え方、進め方』ぎょうせい
 山本宣治 1923『性教育』内外出版
 山本直英編著 1994『性交 その理論と教育実践』あゆみ出版
 山本直英 1999『山本宣治の性教育論』明石書店

【資料】『現代性教育研究』各号概要一覧

(広瀬裕子作成)

| | 発行日 | 特集テーマ・主要記事 | その他特徴 |
|---|-----------|---------------------|-------------------------------------|
| 1 | 1972.5.1 | 性教育とは何か、性教育の必要論と有害論 | カーケンダール寄稿 |
| 2 | 1972.8.1 | 性教育とは何か、変貌する家族 | カーケンダール寄稿 |
| 3 | 1972.11.1 | 人間にとっての性 | エリザバス・ベッテングレン寄稿スウェーデンの性教育、ピルについて中ピ連 |
| 4 | 1973.2.1 | 青少年の性的非行 | 学校と性教育についての海外論争紹介、山本宣治紹介 |
| 5 | 1973.6.1 | ニコル・メルシエ事件 | デンマークの避妊指導 |
| 6 | 1973.9.1 | 現代の性革命 | スウェーデンの性の価値観、リンゼイの友愛結婚 |
| 7 | 1973.12.1 | 性教育指導者の資格とモラル | イサドア・ルービン論稿、日本の性教育の理想と現実、純潔教育と性教育 |

| | 発行日 | 特集テーマ・主要記事 | その他特徴 |
|----|-----------|------------------|--|
| 8 | 1974.3.1 | 人間の性の過去現在未来 | 10代の妊娠についてP.サレル、用語の検討 |
| 9 | 1974.6.1 | 政治家の性教育理解 | 川上源太郎の性教育批判、デニス・ガボール論稿、学校における性教育、マスターベーション |
| 10 | 1974.9.1 | ヨーロッパの性教育 | 婚前純潔についての海外論争紹介 |
| 11 | 1974.12.1 | 地域社会における性教育 | 性教育手引書分析、日本の売春実態、リカちゃん人形と少女文化 |
| 12 | 1975.4.1 | 思春期の性非行と悩み | マンガと性教育、北欧の婚前性行動 |
| 13 | 1975.7.1 | 発達段階に即した生命誕生の指導 | 文部大臣公開質問状、キリスト教と性教育 |
| 14 | 1975.9.1 | 発達段階に即した男女関係の指導 | ハロルド・クリステンセンによる論稿、日本の宗教と性、教員組合と性教育 |
| 15 | 1975.12.1 | アメリカの性教育とセクソロジー | M・Sカロデロン、D・パルスンらの論稿、イスラム教と性の価値観、高校生性の行動 |
| 16 | 1976.5.1 | 若者の性の実態 | ポルノ、老人の性、同性愛イサドア・ルービン、日本人と欧米人の愛と性比較 |
| 17 | 1976.8.1 | 不純異性交遊事件 | 大学生の性行動、少女文化、ヨーロッパの性教育、教育内容の選択 |
| 18 | 1976.10.1 | コマーシャリズム、価値観の多様化 | 性犯罪、同棲、学校での性交指導 |
| 19 | 1976.12.1 | スウェーデンの性教育 | 父母の性教育観調査、野坂昭如インタビュー、日本の近代化と単身者主義 |
| 20 | 1977.2.1 | 若者の性意識と性行動 | ヌードダンサーとストリッパー、大学ホモクラブ、男女交際の指導 |
| 21 | 1977.4.1 | 前文部大臣との対談 | アメリカの性表現の解放、小学生の性犯罪、性教育指導案 |
| 22 | 1977.6.1 | ポルノ雑誌自動販売機問題 | 受験戦争、少女の妊娠・出産、性教育指導案、サミュエル・コールマン論稿 |
| 23 | 1977.8.1 | 男らしさと女らしさ再検討 | 川端康成分析、絵本の性差別、隠語集 |
| 24 | 1977.10.1 | 性行動の低年齢化 | 教育課程政策、初潮全国調査、サルの性とヒトの性、性非行と学校復帰 |
| 25 | 1977.12.1 | 少女の性問題 | ヨーロッパ諸国の性教育、養護教諭、オーストラリアの性教育、失神 |
| 26 | 1978.2.1 | 若者の婚前交渉 | イギリスの性教育殺人事件、近松門左衛門と井原西鶴 |
| 27 | 1978.4.1 | 学校の性教育 | 初潮データ、ヨーロッパアメリカ諸国の性教育、A.キンゼイについて |
| 28 | 1978.6.1 | 性的非行 | 家庭環境と社会環境、養護教諭、電話相談、サドとマゾッホ |
| 29 | 1978.8.1 | 愛とモラル | 女生徒の妊娠、学校における性教育 |
| 30 | 1978.10.1 | 性に関する質問と答え方 | 女子大生の性意識、医学生の性知識、男性と女性の性的反応 |
| 31 | 1978.12.1 | 視聴覚教材による性教育 | 性器の教え方、両親のための性教育入門 |
| 32 | 1979.2.1 | 性教育の年間指導計画 | 性に関する隠語、ボーボワールについて |
| 33 | 1979.4.1 | 男と女の性差・特性・役割 | 性意識性行動の決定要因、男女関係の指導、トイレ落書き |
| 34 | 1979.6.1 | 性情報・ポルノ | わいせつ、有害図書、性表現と法規制 |

| | 発行日 | 特集テーマ・主要記事 | その他特徴 |
|----|-----------|-----------------|------------------------------------|
| 35 | 1979.8.1 | 女性の解放と自立 | 月経の文化、月経指導 |
| 36 | 1979.10.1 | 男子の性 | ハワイ性教育セミナー報告 |
| 37 | 1979.12.1 | 心身障害児の性 | ソル・ゴードンの論稿 |
| 38 | 1980.2.1 | 80年代の女性の性行動 | 日本の学生のセクシュアリティ、女生徒の売春 |
| 39 | 1980.4.1 | 80年代の性の倫理とモラル | メアリ・カルデローンの論稿、性教育年間指導計画 |
| 40 | 1980.6.1 | 学校保健と養護教諭 | 教育課程政策、女性の体と心、指導計画 |
| 41 | 1980.8.1 | 女の自立を阻むもの | 養護教諭、指導計画 |
| 42 | 1980.10.1 | 触れ合いとしての性教育 | 性教育論争、指導計画 |
| 43 | 1980.12.1 | マスターベーション | 性に関する青少年の権利、カーケンダール論稿、指導計画 |
| 44 | 1981.2.1 | カウンセリング | 生徒の妊娠中絶、指導計画 |
| 45 | 1981.4.1 | 性教育 10 年の歩み | セクソロジー、海外の性教育、指導計画 |
| 46 | 1981.6.1 | 避妊 | 指導計画 |
| 47 | 1921.8.1 | 未婚・既婚女性の性行動 | 指導計画、ビデオ教材 |
| 48 | 1981.10.1 | 日本の性教育とアメリカの性教育 | M.ダイヤモンド論稿、指導計画 |
| 49 | 1981.12.1 | 心身障害とセクシュアリティ | スウェーデンの障害者の性と福祉、指導計画 |
| 50 | 1982.2.1 | 青少年の性行動 | 性行動調査、女子高校生の性行動 |
| 51 | 1982.4.1 | 男と女の現在の状況 | 老人の性、学校管理職と性教育実践、アメリカ 10 代の母親、性の歴史 |
| 52 | 1982.6.1 | 男のセクシュアリティ | フランスの青少年の性行動、養護教諭、性の歴史 |
| 53 | 1982.8.1 | 性の比較文化 | 宗教とセクシュアリティ、学級担任の性教育、性の歴史 |
| 54 | 1982.10.1 | 女の一生と性医学 | 性の歴史 |
| 55 | 1982.12.1 | 人工妊娠中絶 | 優生保護法改正問題、カナダの性教育 |
| 56 | 1983.2.1 | 思春期問題 | 性の歴史、カリフォルニア性病教育 |
| 57 | 1983.4.1 | 心身障害児・者の性 | 性の歴史、聾学校の性教育計画 |
| 58 | 1983.6.1 | 性と法律 | 性の歴史、中絶模擬裁判 |